

もんむすぐれずと!3

～ふたなりエルフの淫虐調教～



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

天乙宮

天界。^{こがね}黄金色にきらめく、祝福された世界。

「イリアス様ー。ご用ですかぁ？」

■の残る少年の天使が、上空から小さな輝く羽をはためかせ、
ふわりと着地した。

彼の前には、白い衣をまとった女神が柔らかな笑みを浮かべていた。

「よく来てくれましたね、ラビエル。さっそくですが、あなたに頼みたいことがあります」

「塩、醤油とんこつ、味噌がありますが。サイドメニューのみの注文はご遠慮ねがいます」

「ラーメンの出前ではありません。頼みたいのは、地上に持ち上がっている問題です」

「痴情……？」

「近ごろ、イリナ山地の南に位置する森で、^{ふおん}不穏な気配を感じます」

「ふおーん」



「それを言うなら“ふーん”でしょう。もう、ラビエル。ムリにボケようと
しなくてもいいのですよ。普通に聞いてください」

「ごめんなさいイリアス様。最初のつかみが大切だと思ったの
ですが、空回り気味になりました」

イリアスは気を取り直すと、再び説明を始めた。

「先ほど話した森。そこに住むエルフたちに、奇病が広がって
いるとの噂が妖精たちのあいだでささやかれているようです」



「奇病？ どんな症状なんですか」

「妖精と仲のよい天使によれば、妖精たちはみな顔をうつむかせるばかりで、説明をしたがらないようです」

「はあ。なんだかあいまいな話ですね」

「ですからラビエル、この噂をあなたに調べてもらいたいのです」

「いいですけど、調べてどうするんですか？」



「魔物が……^{あんやく}暗躍しているような気がするのです。私の勘違い
ならば、それに越したことはないのですが」

「分かりました！ もし魔物が悪さをしているようなら、そいつらの
骨という骨をバールのようなものでへし折ってやります！」

ラビエルは腕をぶんぶんと振り回した。

「この問題は、すでに別の天使を派遣してあります。だから、
あなたが戦う必要はないのですよ。どんな病気か、たしかめて
報告してくれば十分です」



「話は終わった？ んじゃ、行こっか、ラビエル。そろそろ、あんたも少しは使えるようになってるといいわね」

妖精の少女が、軽やかに飛び回りながらあらわれた。

「あっ、リムル。今回もでしゃばる気？ 解説役だけの無能のくせに先輩風を吹かすのはやめてよ」

「あんたねー。私をなめてるでしょ？ 妖精だって魔法くらい使えるし、けっこう強いんだよ？」

「そうやっていばるけど、いつも魔物から逃げてばかりじゃんか」

「そりゃ、あんたが自分で立ち向かわないからよ。私は、あんたを手伝うだけの役割なんだから」



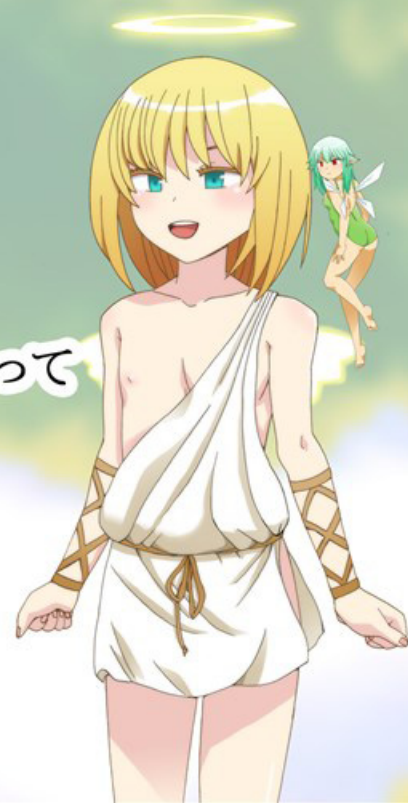
「本当かなあ……？」

「さあ、二人とも。おしゃべりはそのくらいにして、イリナ山地の南へ向かってください」

女神が口をはさんだ。

「ほら、さっさと行くわよラビエル。ついてきなさい」

リムルに先導され、少年天使は地上の世界へと向かって行った。



「この森の奥にエルフの村があるの」

リムルは目の前の、鬱蒼^{うっそう}と茂る森を見た。

「うっそお？ そんなはずないよ」

「ウソなんかつくわけないでしょ。いきなり何を言ってんのよ、あんたは」

リムルはラビエルの戯^ざれ言にかまわず、森の中へ進んで行く。

「あ。待ってよー」

樹木の根で、でこぼこに隆起^{りゅうき}し苔むした地面を、おぼつかない足取りで追うラビエル。



森林の涼やかな空気が天使と妖精の肌をなでる。鳥たちがはしゃぎながら飛び立つと、木の枝はバネのように跳ねて木の葉を振りまく。

「あんたより先にきてる天使がいるから、探しながら行きましょうね」

リムルは飛び進みながら言った。



「先にきて、何をしてるのかなぁ？」

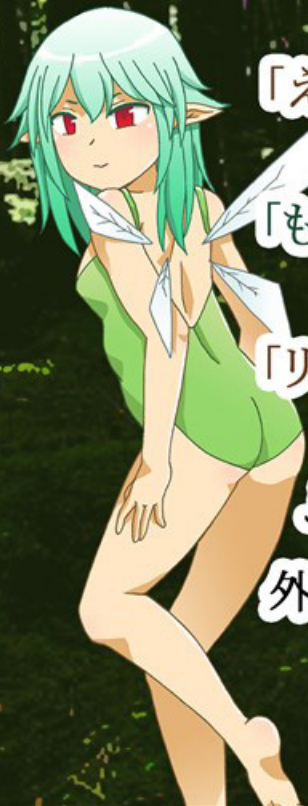
「たぶん、奇病の原因の究明とか、治療の対策とかでしょう。あんたも、先輩の天使からいろいろと学べるいい機会なんじゃないの？」

「えー。ぼく、勉強なんか嫌いだよ」

「もう。そんなことを言ってるから、あんたは半人前なのよ」

「リムルの説教なんかいらないよーだ」

ふて腐れたラビエルは、無言で湿った枯れ葉のじゅうたんを歩く。
外界の気配はすっかりと消え、静かな森の息吹が二人を包みこんだ。



「そこのお二人……」

かすかに届く、静かな、落ちついた声。それでいて、その凜としたひびきには、強い意志と気高さを感じさせる。

「はえ？ ぼくたちですか？」

ラビエルは無邪気なきよんとした顔を声の主に向ける。

「この森にいかなる用があるのかは存じ上げませんが、ここより先は部外者の禁足の地。どうか、お引取りください……」



二人の前に、年若く、それでいて大人びた女性が姿をあらわす。

「もしかして、エルフの村なの？」

リムルが質問をした。

「……エンリカの里。そう呼ばれる村があります。しかし、あなたがたを通すことはできません。お引取りください」

「なんで、入っちゃいけないのよ？」

リムルは動じることなく再び質問をする。

「私たちは、隠れ住んでいるのです。部外者を通すことはできません」



女性の返答を聞くと、ラビエルとリムルは棒立ちのまま、互いの顔を見合わせた。

「えーと……。どうしよう、リムル」

「なにも居座ろうってんじゃないわ。ちょっとチラ見するだけよ。そのくらい、いいでしょ？」

「……お引取りください……」

女性は、瞳をふせ、静かに言い放つ。

「あんたエルフ？ 名前は何で言うのよ？ こっちはねえ、女神イリアス様の命でここにきてんのよ。文句あんの？」



「……イリアスの命……いかなる……理由で……？」

女性はピクリと肩を震わせた。

「ぼく、天使のラビエルって言います。この生意気な妖精はリムル。
ここの森の住人が奇病にかかっている噂があつて、それを調査しに
きたんです」

「そうよ。変な病気の感染が広がったりしたら迷惑でしょ？ だから、
万が一を考えて調査しにきたの」

「……。なるほど……」

女性はうつむいた顔を上げると、心持ち軽くなった声でしゃべり
始めた。



「私はエンリカの村長のような者とも言うておきましょう。その件については心配無用です。女神様には、何ごともないと報告をしてくださってかまいません」

「んー。でもさあ、村の様子を見せて欲しいな」

リムルが食い下がる。

「お姉さん、ぼく、半人前の天使なんです。だから、この調査を成功させて、少しでも一人前に近づきたいんです」

ラビエルは媚びるように懇願する。



「部外者は、立ち入れない。それがエンリカのおきてなのです」

村長はぴしゃりと言い放った。

ラビエルとリムルは、再び顔を見合わせた。



「とりつく島もないわねえ……」

リムルがつぶやく。二人は引き返すと、困り果てて身体^{からだ}を持てあました。

「なんであんなに頑固なんだろうねえ。あの年増女」

ラビエルが苦々しげに言い捨てる。

「んー、そうねえ。エルフってのは、例えるなら処女の潔癖^{けっぺき}さと、老人^{がらんめい}の頑迷さを合わせたような性格なのよ。自然を愛する繊細な心を持つ反面、保守的で、排他的でね。一度心を閉ざしたエルフと仲良くなるのは、容易なことじゃないわ」



「面倒くさい種族だねえ……。もうあんな村の住人なんか、エボラ出血熱にでも感染して滅びればいいのに」

「こらこら。物騒なことを言うなっつーの」

リムルは苦笑した。

「まあ、あの様子だと、先行した天使もまだ村の外にいそうね。森を周って探しましょうか」

「やれやれ。早く天界に帰っておいしいものが食べたいよ……」

ラビエルしょうぜんは悄然としながら、リムルの後ろをとぼとぼと歩く。





木漏れ日^{かさ}が嵩を減らし、空気はひんやりと静まり返る。暗い森の奥深くを、
二人は進み続けた。

「あ、あそこに何かいるわ」

リムルは木立の影を指差した。

「なっ、何？ 鹿？ イクシシ？ 天使？ それとも……」

ラビエルの声音に緊張のおののきが混ざる。目の前の樹木のあいだから、ゆらゆらと揺らめきながら動く生き物が姿をあらわす。



「こんにちは～」

スライム娘が、粘液状の身体をにゆるにゆると蠕動^{ぜんどう}させながら
二人に近づき、あいさつをした。

「や、やっぱり魔物だあ……」

ラビエルはつばを呑んだ。

「あらあら。何かが光ってると思ったら、天使の男の子の羽だった
のね。あたしに食べて欲しくて、こんな森の奥まできちゃったの
かな～？」

スライム娘は嬉しそうに粘液の身体をたぶたぶと揺らした。



「あれはスライムだわ。有名な魔物よ。平たく言うと、ザコの代表ね」

リムルが説明をすると、

「なんだ、ザコかあ」

ラビエルは気の抜けたような声で言った。

「……ザコ……？」

スライム娘はうつむいてぼそりとつぶやいた。



「ふふん。ラビエル、あんた私を役立たずって言ってたわよね。この程度のザコなら、私がチャチャツと追っ払ってあげるわ。あんたは指でもくわえて見てなさいよ」

「じゃあぼくはリムルのあとで、さらに痛めつけるよ」

二人が得意げにしゃべるさなかで、スライム娘の腕は、柔らかに垂れた木の枝のように伸び始めていた。

「三回……。あたしに絶対に言ってはいけない言葉を、三回言ったのね……」

スライム娘が片腕をブンと振ると、地面の枯れ葉がパチンと音を立てて跳ね上がった。



「わわっ。リムル、スライムが攻撃してくるよ！ 早くなんとかしてっ」

「こ、こら。離しなさい。動けないでしょーがっ」

ラビエルはリムルを両手でつかみ、スライム娘に向けて突き出す。

「うふふ……。三十回ちけいの笞刑でゆるしてあげる。それえっ」

スライム娘の腕がうなる。次いでパンと爆ぜる音。

「ぎゃあっ」

リムルの悲鳴が上がる。



「ひいっ。リムル、早く倒してよ。早くっ」

ラビエルはリムルをつかんだまま、左右にぶんぶんと振り回す。スライム娘の腕がひも状に長く伸び、ムチとなってラビエルたちに襲いかかる。

「ふぎゃっ」

リムルの顔面にムチが的中するたびに、するどい悲鳴が空気を裂く。

「ぎゃっ」

「そおーれっ」

「痛あ!!」

「あわわ、あわわあ…」

ラビエルはおののきながらまぶたを閉じて目の前の惨劇に耐えた。



「あたしも疲れたし、今回はこのくらいでゆるしてあげるわ」

スライム娘は笞刑をやめると、粘液のムチを元どおりの腕の形に変形させた。ラビエルがまぶたを開けると、リムルがぐったりと地面に倒れこんでいた。

「えっ？ リムル？ もうやられちゃったの？」

ラビエルはあきれてリムルのぶざまな姿を見おろした。

「いたたた……。粘液の叩きとはいえ、顔面に思いっきり当たるのはキツかったわ……」

枯れ葉に寝込んでいた妖精は飛び上がると、身体の土を払った。



「もぉー。どうしてリムルは毎度毎度、役立たずの糞虫なの……」

「オメーが引つつかむから何もできなかったんだろがッ」



「しょうがないなあ。役立たずに代わって、このぼくがその隠された
実力をお披露目ひろめといきましょうか」

ラビエルはスライム娘たいじに対峙すると、一歩踏み出した。

「うふふふ。次の相手は天使くんかな？」

スライム娘は不敵な笑いを漏らす。

「行くぞザコ！ お前の悪行あくぎょうは今日までと思え！ うりやりや一つ」

天使は奇声を発しながら、スライム娘を目がけて走り出す。



「くらえーっ」

ラビエルは駆けながら叫ぶ。

「ラビエルタックル！」

ラビエルは走りながら、スライム娘の身体に己の全身を叩きつけた。

「おうっ」

魔物は小さな声を吐き、粘液の身体がぶるんと揺れる。

「ラビエル張り手えー！」

魔物の至近距離から、ラビエルは何度も平手を叩きこんだ。

パン、パン、パンと鈍い音が鳴ると、粘液の塊はそのたびに細かく振動をした。



「はあ……はあ……。どうだザコ。思い知ったか！」

いくつもの平手型にへこんだ粘液の壁を見とどけると、ラビエルは勝ち誇った。

「……それで、終わりなの～？」

へこんだ粘液はぶるんとひと揺れすると、元どおりの綺麗なスライム娘の姿へたちまちもどった。

「そ、そんな……」

「ふふふ。ざんねんね～。あたしに打撃は通用しないのよ。もっとも、今みたいな攻撃じゃあ子犬を追い払うくらいがせいぜいだと思うけどね。しょせん、チビっ子ね～」



「な、なんだとー!!」

ラビエルはカッとなって蹴りを入れる。足が当たったスライムのボディは、そのまま足を巻きこむようにへこんでいく。

「きゃはっ。つかまえた〜」

「わわあ、はなせっ。このザコ!!」

ラビエルが悪態をつきながらじたばたともがくと、足はますます粘液の奥へめりこんでいく。スライム娘は半身をラビエルの両足にのしかからせ、青い粘液の内側に取り込んでしまう。

「ほらあ、もう動けないでしょお」



「うわあ……食べないでえ……。ザ、ザコって言うですみませんでしたーっ」

「あらら、もうギブアップ？ いじめがいのない天使くんね」

スライム娘はにやにやと笑う。ラビエルのひざから下は、スライムの体内にすっぽりと包まれてしまった。

「リムルーっ。助けてえー」

ラビエルは情けない声で救助を求める。

「まったくあいつは……なんであんなに弱いのかしら」

リムルは羽をうならせると、スライム娘に目がけて飛びこんだ。

「さっきのお返しよっ。くらえ妖精魔法……ぎゃひんっ!!」

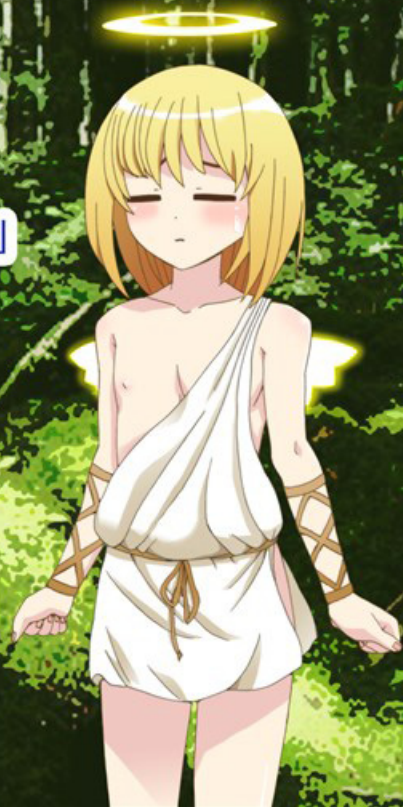


ムチに変形したスライム娘の腕に顔をはたかれ、リムルは地面に
転げ落ちた。

「リッ、リムル……。弱すぎ……」

ラビエルは絶句した。

「うふふ。邪魔者は消えたし、あたしと楽しもうね。天使くん」



スライム娘は人差し指をラビエルのペニスの先に押しつけた。

「スライムのすごさ、キミの内側に叩きこんであげる」



「な、何をする気ですか？ そこは大事なところだから、食べちゃダメですよ……」

「そおーれっ」

掛け声とともに、スライム娘の指先がミミズのように細長くなって、ラビエルの尿道の奥へと滑りこんでいく。

ぬるるるるっ

「はおおおおおうッ」

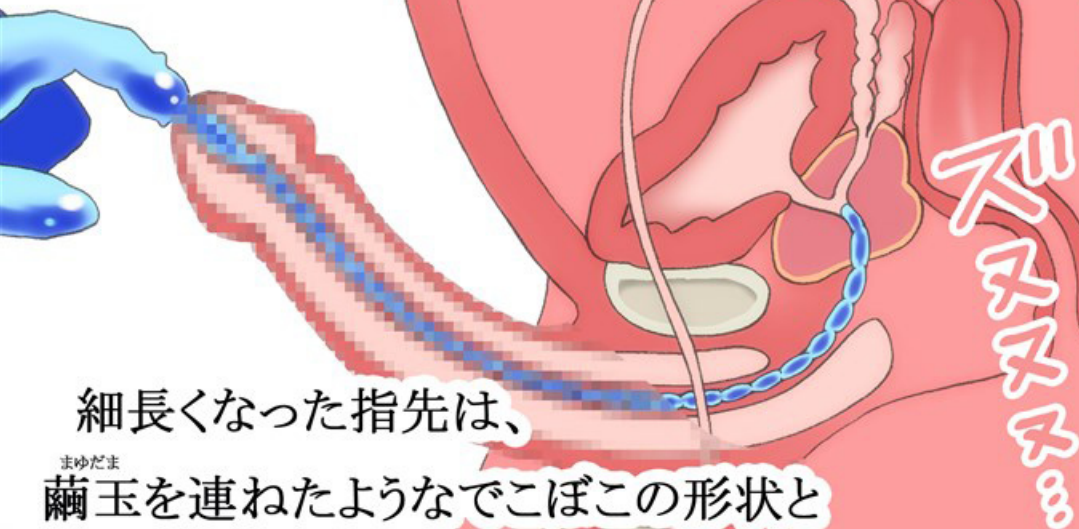
天使はビクンと上体を反らす。



「ほーら……。おちんちんの中を犯される感触はどう？」

「お……。おおう……」

ラビエルは声にならない声を上げる。



細長くなった指先は、
まゆだま
繭玉を連ねたようなでこぼこの形状と
なり、尿道の奥深くへ進入していく。

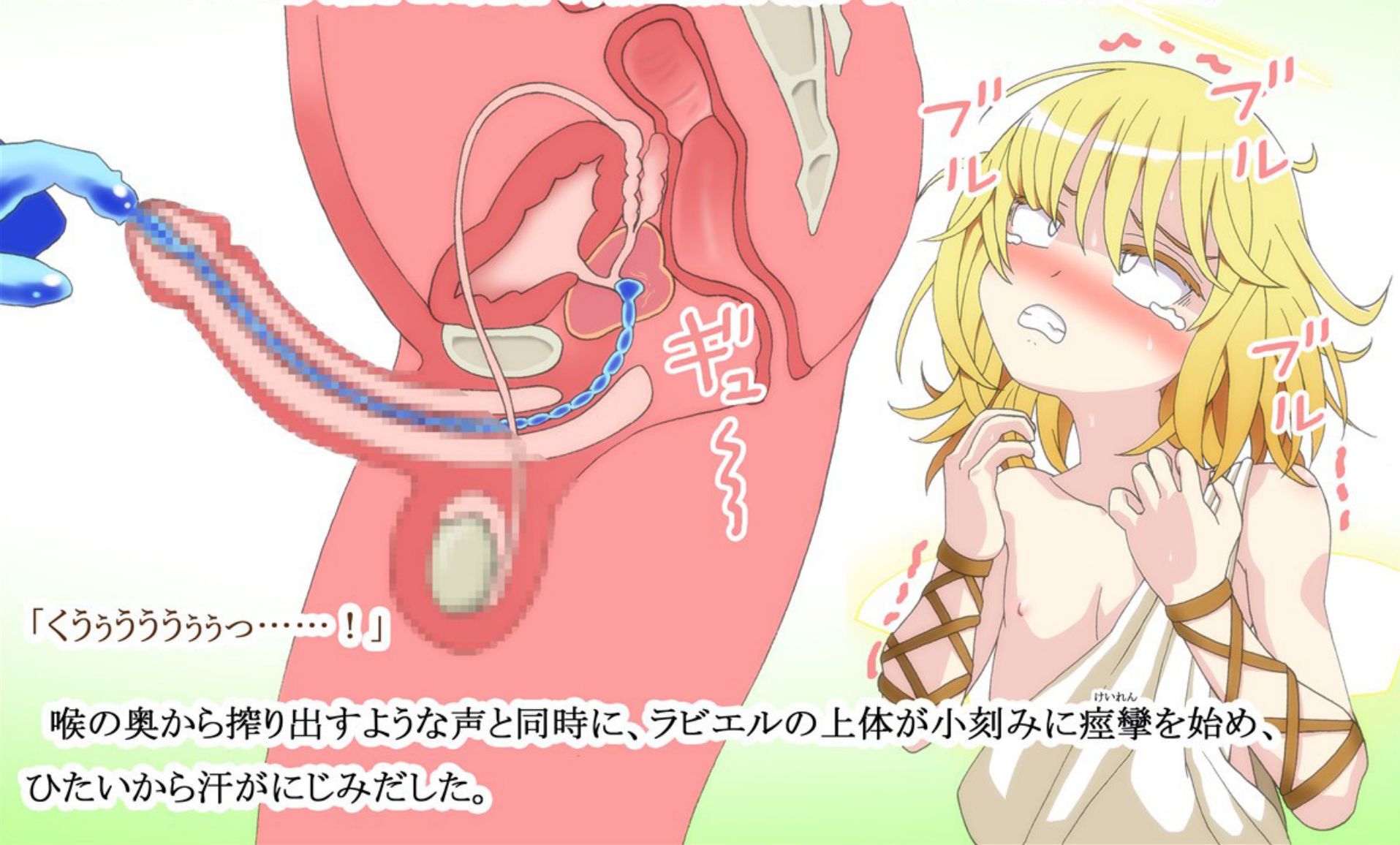
「くるっ……。くるっ……。奥にくるう……」

むにむにとした弾力のあるジェルの棒が、うねうねともがきながらペニスの
奥へ奥へと入っていく。



「ほら、このコリコリしたところが前立腺だよー。男の子の一番気持ちいいところ」

ジェルの棒は肥大化させた先端で、前立腺を内部からぎゅうっと強く押した。



「くうううううっ……！」

喉の奥から搾り出すような声と同時に、ラビエル^{けいれん}の上半体が小刻みに痙攣を始め、
ひたいから汗がにじみだした。

「その奥についてるこれが精囊。このヒダヒダに精液が溜まってるんだよ～」

ジェルの棒は精囊の小さな口をこじ開けて、ズルンと滑りこんだ。



「はあ……うっ……」

「どう？ こんなところまで犯せるのはあたしくらいだよ。すごいでしょ？」

「す、すごい……です……。すごすぎて、お、おかしくなりそうです……」



「こっち側が精管だよ。せまいけど、がんばって入るね。……えいっ」

「ひっ、ひiiiiiiii……！」

ズ
ブ
ブ
ブ

ジェルの棒は、上下左右にくねりながら懸命に精管の奥へと登っていく。
弾力のある棒にペニスの深部まで貫かれ、電流のような快感がラビエルの
内部をブルブルと走る。

「もっと奥にいくよお。もうすぐ金玉の中身をかき回してあげるからね」

「ゆっ……、ゆっ……、ゆるしてええええ……」

もんむすぐれずど!3

～ふたなりエルフの淫虐調教～

「くああああ……。うつ……。うううう〜っ」

かたすみ
森の片隅に、天使のよがり声がこだまする。

「ああ、どうしよう。このままじゃラビエルが壊されちゃう……」

リムルはなりゆきを呆然と見つめていた。



一瞬、大気が輝く。

熱を帯びた閃光がスライム娘に貫通する。魔物は驚きの声を発するヒマもなく、蒸発して消えてしまった。

「あう……？」

ラビエルは呆けたままだった。

「ごめんね。おくれちゃって。大丈夫だった？」

落ち着いたある、澄んだ声。軽やかなひびきの中にも、かすかに甘ったるい媚びを感じる。それは彼の性格をよくあらわしていた。



「まさかスライムにやられているなんて、思わなかったから……。
でも油断は禁物だね」

白い布を胴体にまとった、白磁のような肌の少年。ラビエルはフラフラと
足を動かし、彼に近づいて顔をのぞいた。

「あ、キミはもしかして……」

